

茶わん虫のうた



中山とし子

表題の唄は、鹿児島県人にはなじみの郷土歌（俗謡）である。「県の特産品」と言って良いかも知れない。内容はよく知られている通り、「茶碗蒸し」と「茶碗虫」の意味の行き違いを、鹿児島弁の面白みに乗せて、軽妙で親しみやすく調子をつけたものである。歌詞のおかしさ、曲の素朴さ、愛唱しやすさ、覚えやすさから、県人に愛され面白がられ、小さい子でもすぐに覚えてしまう。練習したわけでもないのに、何十年経つても忘れないところが不思議だ。作者は、大正末、現在の霧島

市にある宮内尋常高等小学校の教師であった石黒ヒデという人だそうである。

今回、私はこの唄の文法的解説という暴挙に挑戦した。恐らく、鹿児島県広しと云えども、俚言りげんの文法的分析という、無粋で徒勞とも見える仕事をされた方はないのではなからうか、という想定の下、元日本語教師の経験を生かして、敬愛する「茶わん虫のうた」に向っていったのである。私にとって、これは思ったよりも楽しい時間であった。もし、以下の解説に納得のいかない県人（賢人）がいらっしゃいましたら、どうぞご一報くださいませ。共に、より良い鹿児島弁の歴史と保存に知恵を絞ってまいりましょう。

説明の都合上、行数を①②③・・・、という風に、番号で判別しながら解説する。

茶わん虫のうた

- ① んーだもこーら いーけなもんな
- ② あーたいげーの ちゃわんなんだ
- ③ 日に日に三度も洗(あれ)もんせば
- ④ きれいなもんごわんさー (どー)
- ⑤ 茶碗についた虫じやるかい
- ⑥ めごなどけあるく虫じやるかい
- ⑦ まこてげんねこっじゃ わっはっは

【解説】

- ① んーだもこーら いーけなもんな

「(う) んだも」は、「(う) んだもしたん」の後半を省いた形の感嘆詞である。びっくりしたときに「んだも!」、と無意識に口を吐いて出た後で、「あん人が交通事故に遭いやつたちな!」という具合に続く。単なる驚きでなく、「ありそうもない」「信じられない」と、

先ず否定してかかる大袈裟なニュアンスを含んだ心情を表す。

「(う) んだもしたん」の語源を辿れば、『鹿児島方言大辞典』(橋口満著 高城書房)には、「ウヌダチモウシラヌ(己達・知)の転訛」とあり、これに従うと、「(う) んだ」は、「私(たち)」、「も」は「もはやこれ以上は・・・ぬ」と使うときの副詞「もう」。「知たん」は「知らん」の転音なので、直訳すれば、「私は、もはやこれ以上の事は知らない(聞いたこともない。それくらいびっくりだ)」となるが、今やこれはかけ声のようなもので、びっくりしたまげたときの慣用表現化している。

「んだ」は「(う) んだ」の「ウ」が音源的に脱落したもので、「うんだもしたん」が語源的には正しいのであろうが、早口で言うときには、唇が「ㄱ」の音を怠けて落してしまうので、意味が通れば結果的に「ンダ」となる。

「うんだ」は、元々は、[wunɔdatɕi]の鼻音「ヌ」が後続の「ダ」[ɔ]と合一し、「(ウ)ンダ/unda」になったものであろう。/ɔ/と/ɔ/は、調音点(音を作る舌の位置)が歯の裏側の同じ位置にあるので、舌が「ヌ」[n]と「ダ」[d]の二回働くところを怠けて一回にはしよった形である。語末の「チ」[tɕi]は、無声化しやすいので脱落したものと思われる(註一)。

以上のように、「ウヌ」が「ウン」となり、「ン」にまで省略短縮されたと考えられる。「ン」に変えて発音する(なまる)ことを「撥(はつ)音化」と言う。

「んだもしたん」を運用の面から見てみると、「びっくりたまげた」というニュアンスを含みつつ、普段は、「んだも!」「んだもしたん!」、と結構軽いノリで使っている。大したことではないのに、「んだもしたん」といかにも大したことのように言いたがるのが鹿児島

県人の特徴である。本当に驚いたときには、「んーだもしたん」と、「ん」を伸ばしてしまふ。又、「んだもしたーん」と「た」を伸ばして感嘆(哀悼、共感、抗議、感動・・・等)の意を伝えたりする。イントネーション(音の高低)やプロミネンス(ある部分を強弱をつけて発音したり伸ばしたり縮めたりして、ある意味合いを付け加える)を駆使することで、吉凶どちらにも、どんな意味にもなる慣用句である。

もし、友人が百万円の宝くじに当たったなら、「んーだもしたーん!」とでも言うであろう。時には、「んだも、んだも、んだも!」という具合に急ぎ騒ぐこともある。鹿児島県人は表現力が豊かであるために、大げさな言い方を好むように思う。

ちなみに、英語の“OH, MY GOD!”と大変良く似たニュアンスである。

英語方は、「この表現に見合う日本語が見当たらない」、等と悩んでおられるようだが、「んだもしたん！」を知らないからであろう。「こーら」は、「これは」を短縮した言い方で、調子を取るためのかけ声の役目である。鹿兒島弁の最大の特徴は、「短縮する」というところにある。

「いけなもんな」は、「どうしたことでしょうか」であり、「いけな」は元々は、「如何様な」であろう。「いけな/ikena」は「いけん」と撥音化した形でも使う。「どう、どんな、く？」の疑問詞と思えば良い。「いけな顔?」、「いけな人?」、「いけな理由で?」、「いけんしたと?」＝「どうしたの?」の如し。

②あーたいげーの ちゃわんなんだ
「あたいげー」の「げー」は、「家(うち)」のこと。従って、「あたいげー」は、「私

のうち」。同じように、「おはんげー」は「あなたのうち」、「あん人げー」は「あの人のうち」を表す。

「ちゃわんなんだ」の「なんだ」は、「等」の転音であるが、これは「複数」の意味と、「茶碗」という対象を話題に取り上げ、以下の陳述につなげるための働きを持った接尾語の二つの捉え方ができる。籠に伏せてある茶碗はたいてい複数だから複数形と捉えたくなるかもしれないが、ここは、その語を主題(話題の主。文中の主人公と考えても良い)とする働きのある接尾語と考えた方が良いと思う。「茶碗」に「なんだ(等は)」をつけることで、話し手が茶碗に何らかのこだわりがあることが表現される。例えば、「あたいげんしなんだ」は、自分の夫に対して妻たちがよく使う言い方である。「あたいげん」の「げん」とは、「げーの/geheno」が短縮し、最後が

「の\ndo」と鼻音であるために、「げん」となまったものである（註二）。「し」とは、「人」のこと。従って、「わたしのうちの（げん）人」は、すなわち「自分の夫」を指すので、これに「なんだ（等は）」を付けても複数の意味にはならない。ここは夫に「なんだ（等は）」と、物にでも付けるような接尾語を付けることで、主題となる夫から少し距離を取り、ぼかして客観化する作用がある。言外に妻の微妙な気恥ずかしさやこだわり感が表現され、文末の感情を含んだ陳述に繋がっていく。

例… あたいげんしなんだ（うちの主人たら）、昨（よ）夜（べ）は酔（よ）食（く）ろて（酔っぱらって） 良か気分じゃしたが（でしたよ）。

（断定・不満）

話し手の性別や、話し手と話題の物や人との親疎上下関係、話し手と聞き手との親疎上下関係により、「なんだ\なんか」と使い分け

るが、いずれも、「○○なんだ」の「○○」を主題として、ある感情の下に文末の陳述につなげていく役割があるようだ。従って、「あたいげん茶碗なんだ」|| 「うちの茶碗といったら」「うちの茶碗でしたらねー」と、「茶碗」を主題として、話し手が何か述べようとしている気持ちが表示される。聞き手に改めて注意を向けさせ、その後で主題の説明のある感情の下に陳述する文となる。陳述のことをモダリティと言う。つまり、「○○なんだ」ときたら、文末には、話し手の「意思」「推量」「断定」「判断」などの心的態度や、「悩み」「不安」「怒り」「確認」などの気持ちが表れる形式の文となることがわかるわけである。

例… うちのすったれ（末っ子）なんだ、いっちゃん（全然）勉強をせんで、こら（これは恐らく）、高校も危うかとじゃなかるかい。（推量・不安）

③ 日に日に三度も洗(あれ)もんせば

「日に日に」は、「毎日」の意味だが、「日に日に」とあえてくり返すことで、くり返し継続している意味合いを強める。「毎日」＝「めーひに」という言い方もあるが、「日に日に」の方がやや大げさな表現となると同時に、唄のリズムとしても良い。

「洗もんせば」は、「洗ひ」＋「申(まう)せば/mauseba」の母音 [au] を、「オー/ɔ:」と発音する現象(開音)のため、「洗ひ申(もー)せば/araino:seba」(註: [ɾ/hi] は、ほぼ「イ/ɪ」と発音されるため、便宜上 [ɪ] と書く)とまず長音変化し、同時に「arai」の [ai] が [e] に転音同化(註三)し、「洗/are/あれ」と発音される。更に調子を取るために「洗(あれ)もーせば」から「洗(あれ)もんせば」と、最終的に撥(はつ)音化したものであろう。俚言

の特徴として、舌や唇が怠ける結果、語を引き伸ばしたり(長音化)、詰まったり(促音化)、撥ねたり(撥音化)を多用するということがある。

④ きれいなもんごわんさー(どー)

「きれいなもん」は、「清潔なもの」。「ごわんさー」は、「御在す」「御座す」に、強意を示す終助詞の「さ」をつけ、断定的表現をしたものである。文頭に「茶碗なんだ」ときだから「ごわんさー」と「断定」の文末になっている。文法的にはそうであるが、唄の性質上は、「茶碗なんだ」と、軽く冗談めかして言い放ち、その結果として、「さー」と冗漫な軽味を添える文末を持って来て、唄をリズムカルに賑やかにしている。唄い手のリズム(軽快かそうでないか)や、プロミネンス(どこを強く唄うか)の使い方により、如何

様にも唄うことができるが、「ちやわんむしのうた」は、本来「抗議」「言い訳」したいところを、軽くおどけた調子で唄うからこそ面白いのだろう。地域によっては「ごわんど」というところもある。



⑤ 茶碗についた虫じやるかい

(そうおっしゃっているのは) 茶碗についた虫のことでしょうか。言外に、「うちの茶碗に虫がついているとでも言うの？」の意味が匂う。

⑥ めごなどけあるく虫じやるかい

「めご」は「籠」。「け歩く」は、「歩く」に卑罵の接頭語「け」を付けた形である。歩く主体である「虫」のことを、卑小で蔑すべきものとして扱っていることを示す。卑罵の接頭語「け」の例として、「け死ん」、「け枯る

っ」、「け忘るっ」、「けだれた」Ⅱ「疲れた」(鹿児島弁辞典サイト 「おんじよどいの小屋」から) などがある。いずれも失望と忌々しい感情が伴う動作である。

又、ここでも、「籠など」と、接尾語を付けているが、「籠」と断定するのをあえて避け、ぼかして、「それとも虫がいたのは) 籠の方とか？」と、とぼけた軽い疑問を内包しており、それとなく相手をおちよくった感じになる。このような言外の意味をわかることが、この唄の真の面白さをわかることである。

⑦ まこてげんねこっじゃ わっはっは

この部分は、オリジナルにはなかったというのだが、伝承されるうち自然にくっついてきたものだろう。「まこて」は、「まことに」「本当に」。「げんね」は元は、「験無くある」で、「げんなか」から「げんね」と転訛し

た形。「恥ずかしい」の意味。従って、「まこととに恥ずかしい(面目ない) ことですよ」となる。「げんなか」は、一般に「恥ずかしい」と訳しているが、共通語の「恥ずかしい」よりも意味が多く深い。「きまりが悪い」「気兼ねである」「申し訳ない」「恥だ」「面目ない」「面映ゆい」など、いろんな意味で使える。

この言葉には、案外謙虚な鹿児島県人の気風が反映されているように思う。

「茶わん虫のうた」は、最近、発祥の地である霧島市隼人において、踊りをつけて全国的に売り出そうとする運動が始まっている(二〇一四年七月二十五日付南日本新聞)。又、NHKの「みんなのうた」でも、二拍子に編曲されて賑やかな上にも賑やかにリメイクされメジャーデビューした(註四)。テンポの良さといい、内容の面白さといい、全国的に広まると、世の中を明るくしてくれること請

け合いだ。

実は、現在住んでいる奈良で、思いがけなくこの唄と出会ったことがある。

二〇〇六年から二〇〇七年にかけて、自宅近くにある特別養護老人福祉施設「かがやきの苑」で対話ボランティアをしていたときである。私が担当したフロアーには、鹿児島出身の方が、今思い出すだけで三名いらつしやり、すべて女性であった。一フロアー二十名くらいの入所者の中で三名というのは、奈良、大阪、京都出身以外では、割合的に鹿児島出身者が最も多かった。こちらに子供さんたちがいて、親御さんを自分の住まいの近くに置く都合上、親御さんたちは、はるばると鹿児島からこの地に移動して来ていらつしやるのである。どなたも認知があるが、鹿児島のアクセントはそのままであり、その方々と話す

ときは、私も鹿児島のアクセントで話した。あるお正月を前にしてのお楽しみ会の時間だった。大方は消極的な顔の輪になった集団の中から、突如小柄なおばあさんが立ち上がり、大きな声で唄い出した。

「んーだもこーら　いーけなもんじゃ・・
・・」

突然のことに私は驚いた。数十年間頭に浮かぶこともなかった「茶わん虫のうた」が、目の前で朗々と展開されているのだった。驚くと共に、なぜか少し気恥ずかしかった。実はこの方は目がご不自由だったが、まことに大きな声で堂々と唄い終わった。私もつい途中から手拍子を取って唱和した。不意に、熱いものが喉を上ってきた。私が自己紹介で、「鹿児島出身です」と言ったことに対して、当然のように、そのおばあさんに「茶わん虫のうた」が蘇ってきたのであろう。

「鹿児島県人なら、唄（うた）がなっどが」（唄えるはずだ）と、彼女はやや厳しい声で言った。私は入所者と一緒に唄うことは好きであったが、歌詞を忘れていたりして皆さん積極的ではない。それで、つい、幼稚園の先生のように声を張り上げ、入所者をリードする態度が出る。そこにいささかの苛立ちも感じておられたのだろうか。あるいは、大方の唄を忘れていて、唯一努力しないで唄えるのがこの唄だったのかもしれない。それにしても、いかにも鹿児島の女性らしい、りりしい態度であった。私は自然と立ち上がって彼女の隣に行き、一緒にもう一回「茶わん虫のうた」を唄い出したのだったが、すぐにむせぶほどになり、声にならなくなった。こんなに遠い場所で、偶然の出会いである私たちが「茶わん虫のうた」一つで、まるで百年の知己のようにつながったことが、思いがけない

感情の発露として深いところからせり上がってきた。

故郷にあっても異郷にあっても、「茶わん虫のうた」は人と人を一瞬にしてつなく温かく明るい唄である。

(二〇一五年刊『朱いちちゃんちゃんこ』掲載作品に加筆修正を加えたもの)

(エッセイスト)

註一：[umudati]の[ɸ]は、そこに特にアクセントがない場合、無声子音 χ /と口の開きが狭い母音 ɛ /でできているので、語末にくると鹿児島方言では無声化(音を出さない)しやすい。多くは「旅立ち」→「たびだつ」、「夕立」→「ゆうだつ」という風に「つ」に転訛されている。

註二：鹿児島では、 m / ɸ / m の鼻音が最後に来るときは、 N になりがちである。「海 u 」→「ウン」、 in 」→「イン」、 ikena 」→「イケ

ン」、「噛む kamu 」→「カン」、「食べもの tabemono 」→「タベモン」の如し。

註三：ある音が前後の音の影響を受け別の音になること。ここでは隣り合う「洗 arai 」の ai 」が別の音声 e 」に変化している。これを相互同化と言う。例として、「大根 daikon 」→「デコン」、 ha 」→「ヘ」、「貝 ka 」→「ケ」等。「蠅 ha 」→「ヘ」は後ろの e 」に引かれて he 」と同化したものなので、後退同化という言い方をする。

註四：「茶わんむしのクンビョ」SAKAKI MANGO & LIMBA
TRAIN SOUND

